

「用語の定義を調べる」過程のふりかえりから自律的学修を促す初年次教育の試み

—アクティブラーニングの効果に着目して—

鈴木 崇夫・松本 美紀
SUZUKI Takao, MATSUMOTO Miki

1. はじめに

中央教育審議会大学分科会制度・教育部会（2008）によると、大学教員の6割以上が学生の「学力低下」を問題視し、特に論理的思考力や表現力、主体性などの能力の低下を指摘しているという。答申の中で、学士課程への初年次教育の位置づけの必要性を唱え、初年次教育とは「初年次学生が大学生になることを支援するプログラム」と説明している（p.35）。

本研究を行った愛知県のN大学（私立）においては、1999年度より初年次教育プログラム^(注1)が行われており、ちょうど20年目を迎えていた。大学の学修^(注2)が自律的に行えるようになるための基礎的なスキルを身につけることを目標に1年間のカリキュラムが組まれている。

2. 研究の目的と研究課題

本研究は上記N大学の初年次教育プログラムにおける高校卒業直後の入学初期に、専門性の高い学修の準備段階として「(学術)用語の定義を調べる」課題を課し、アクティブラーニング活動を通して上記課題に取り組むことにより主体的で自律的な学修意識を促せるかを検証することを目的とする。

3. これまでの関連する研究

私学高等教育研究所（2005）のまとめた大規模調査の結果では、学生の学問や大学教育全般に対する動機づけの低さが指摘されている。

溝上（2015）はアクティブラーニングを「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での、あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には、書く・話す・発表するなどの活動への関与と、そこで生じる認知プロセスの外化を伴う」と定義する。

また、岩井（2006）は、初年次教育におけるアクティブラーニングの可能性を論じており、アクティブラーニングは学生に何かをさせると同時に、自分が何をしているかについて考えさせるものだとしている（p.25）。また、アクティブラーニングを導入することは、モチベーション向上や問題解決能力向上にも役立つという。

これらの先行研究を踏まえ、本研究では能動的な学び、

認知プロセスの外化、自分が何をしているかについて考えるという点に焦点を当てた実践の分析を行う。

4. 研究の対象と実践の手順

研究の対象はN大学（私立・文系言語系学部）の1年次学生2クラス合計40名である。1年を通して同じクラスで初年次教育プログラムを受講する。

実施の手順は、まず①事前学修として学生に用語の定義を調べるワークシートを課題（宿題）として与え、各自で取り組み、翌週の授業時に持ってくるよう伝えた。ワークシートでは、あえて意味のつかみにくい抽象的な2つの用語（母語・キャリア）をそれぞれ2つ以上のツールを使って調べるように指示した。次に、②ツールの多様性や記述内容の違いへの気づきをねらい、各自がクラスに持ち寄った用語の定義をグループワークでまとめさせた。その後、③宿題に取り組む際に使用したツールの選択理由を各人でふりかえり、シートに記入し可視化した後、それについてもグループで共有させた。最後に、④専門科目の授業やレポートで扱う用語の定義は、どのように解釈し理解する必要があるかを、学術書や専門資料に記述の定義と比較しながらクラス全体で検討した。さらに次の週、⑤授業のはじめに本実践活動のふりかえりをシートに記入させながら自己内省を促した。

5. 分析の方法と実践の結果

手順①の宿題シートを回収し、そこに記述されたツール名およびツールを選択した理由に見られる特徴を分析した。その結果、22名（55%）の学生は身近にある電子辞書のみを使用していることがわかった。一方で、紙媒体の辞書や書籍を使用している学生は9名（22.5%）にとどまった。

ツール選択の理由を分析すると、以下の表1のように整理することができた。

表1 ツール選択の理由

1	1-1. 意図がなく未検討
2	2-1. 不確実な信用（思い込み）
	2-2. 能動的/主体的要因

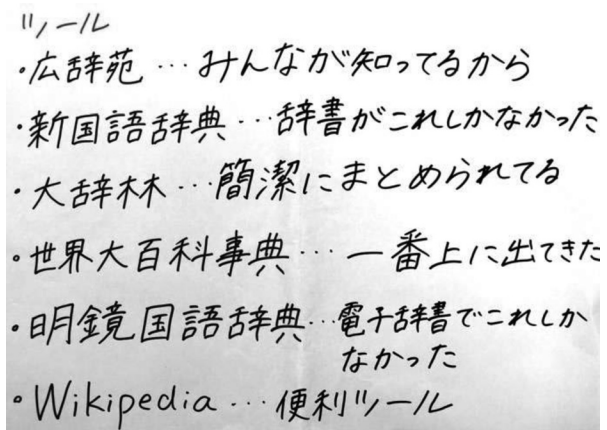
第1は、ツールの選択そのものに“意図がなく未検討”というもので、「電子辞書に入っていた」「家にあった」「いつも使っている」「一番上に出てきた」に見られるような身近なものを使って手短かに宿題を終えるという学修姿勢である。

第2は、“不確実な信用（思い込み）”というもので、「みんなが知っているから」「有名（老舗ブランド）だから」「情報量が多いと思った」に見られる、よく聞く名前の辞書であるから信頼でき、内容もふさわしいというような思い込みによる、クリティカルな視点に欠ける学修ストラテジーである。

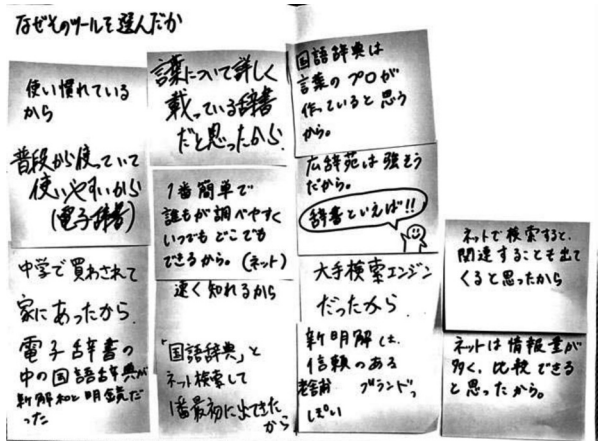
第3は、“能動的・主体的な学びにつながるもの”で、「意味や定義が簡潔に書かれていてわかりやすかった」「紙媒体と電子媒体で違いがあるか知りたかった」「関連語と一緒に見られるから」など、調べようとしている用語が自分自身にとって理解しやすかったり、より深い学びにつながるということが意識されている学修ストラテジーと言える。このように課題に向き合えたのはクラス全体の6名（15%）にとどまった。

以下は、手順③の課題に取り組む際に使用したツール選択の理由をグループで共有し、学生自身でまとめさせた成果物である。

【成果物1】



【成果物2】



次に、手順⑤の再度行った学修活動のふりかえりで学生が記述したふりかえりシートを回収し、「用語の定義」を調べる学修で得られた学生の気づきや学びについて、先行研究を踏まえて分析した。学生自身のことばで言語化されたふりかえりの内容は、表2のように分類できた。それぞれの項目において書かれた内容を要約し表2の下に記す。

表2 ふりかえり内容の分類

①	目的意識を持って選ぶ
②	多角的に（複数）見る・信頼性を検討する
③	必要とする情報（量）が得られているか検討する

①目的意識を持って選ぶ

- ・自分で解釈しやすいものを探す
- ・自身の目的に合っているものを選ぶ
- ・より確かな情報を得られるようにする
- ・専門的な場合は専門性のある文献を参照する

②多角的に（複数）見る・信頼性を検討する

- ・1つのツールだけでなくより多くのツールから情報を得ることが大切
- ・多種のツールで内容を見比べ適切なものを選ぶべき
- ・多くのツールを使う方がよりよい情報が得られる
- ・いろんな角度から情報を見ることが大切
- ・信頼性があることを確かめる
- ・違和感を感じたときは他のものも見る
- ・辞書が最新版もしくは比較的新しいものかを確認する

③必要とする情報（量）が得られているか検討する

- ・誤った情報を選んでいないか見極める
- ・情報を鵜呑みにしない
- ・正確性を吟味することが大切
- ・間違った解釈をしていないかを考えることが大事
- ・言葉の意味を自分で解釈してから使う

6. 考察

事前学修（課題）におけるツールの選択では、前頁表1に示すように、未検討という学修姿勢と未検討ではないが不確実な信用／思い込みによるもの、そして能動的・主体的なものという学修ストラテジーが見受けられた。課題遂行において能動的・主体的な学修ストラテジーをとる学生の割合はわずか15%と極めて低かった。大学ではあらゆる側面において自律的な学修が求められる。したがって、大学の早い段階で全ての学生が能動的・主体的に学修と向き合えるよう、初年次教育において動機づけと意識の改善を働きかけていくことが急務である実態が浮き彫りとなった。

事前学修後のクラスにおけるアクティブラーニングでの2つの活動を通し、自分が何をしているか考えること、

そして認知プロセスの外化を試みた。表2の内容が示すように、ツールや情報の多様性や異質性に気づきが起こり、目的意識を持って課題に取り組むことが大切であるという学生の意識変化が窺える。また、「自分なりに」「自身で」「吟味する」「見極める」等の表現がふりかえりで多く表出したことを考えると、自分が理解をしたい文脈において、必要としている意味はどれなのかというような自己の解釈との関連を踏まえたり、複数の情報にアクセスし信頼性を検討したり、多角的に意味を検討したり、情報の新しさを検討したりすること等が必要だという学生自身の理解が読み取れる。

加えて、前頁の成果物2の中にもあるような「中学で買わされて家にあった」や、高校の学校指定の辞書だった、中学校や高校の先生の推薦辞書だったなど、大学入学前に与えられたものの影響を強く受けていた学生も見受けられた。こうした影響を取り除く上でも、アクティブラーニングは効果があり、学生自身の気づきによってこれまでに習慣化した学修方法から抜け出すきっかけとなっていた。

手順⑤のふりかえりの中では、「英語でも日本語でも文を書く時、たくさん辞書を使うので、自分の意図する本当の意味をしっかりと調べることができるのもスキルの1つだと感じた」と記述した学生もおり、これが大学生のアカデミックスキルだと自己理解できている学生も見られた。

高校までの学習と異なり、大学には国の検定教科書があるわけではないため、多種多様な媒体の文字情報と向き合っていくためには、高度なリテラシー能力を身につけていくためにも、学術用語やわからない言葉をどのツールで調べ、どの意味で解釈するかを自ら考えられる力は専門的学びを深化させるためにも重要であり、大学生として必須の能力だと言えよう。また、高大接続をスムーズにするためにも、初年次の早期に身につけるべき能力だと言える。

7. 結論と今後の課題

アクティブラーニングには様々な手法があり、学修のねらいや内容により様々な方法がある。どのようにすれば最も教育効果を生み出すかを定めることは難しいが、文部科学省(2017)の新学習指導要領に記されるように、「主体的」「対話的」「深い学び」という視点から授業を構築していくことで、学生の意識変化は起こるといったことがわかった。

「用語の定義を調べる」という1テーマではあるが、本実践で得られた結果を見れば、どの学生も学修のあり方に対する一定の意識変化が起きており、初年次教育で扱うテーマとしてふさわしいものだと言える。

したがって、「用語の定義を調べる」というテーマ活

動にアクティブラーニングの手法を用いた実践は、初年次早期の教育としても意味のあることであり、また初年次学生の自律的な学修意識や能動的な学修ストラテジーを育てることにつながるものだと言える。

本実践では協力者の数が多くなかったことから、質的な分析が中心となったが、今後は、高校までに形成された学習姿勢、態度、ストラテジーはどのようなものか、現代の初年次生の全体的特徴を追究したい。その上で、本実践の考察と重ね合わせて再検討し、さらに本研究を発展させていきたいと考えている。

注

- 1 当時、筆者らは非常勤講師としてこのプログラムの授業担当をしていた。
- 2 本稿では、引用部を除き、大学生の学びを学修と記す。

参考文献

- 岩井洋(2006)「初年次教育におけるアクティブラーニングの可能性」『リメディアル教育研究』1(1), pp.22-28.
- 私学高等教育研究所(2005)「私立大学における一年次教育の実際」『私学高等教育研究叢書4』
- 鈴木崇夫・松本美紀(2018)「レポート作成過程における文献・資料選択の質を高める実践－アクティブラーニングを活用した大学生のアカデミック・スキルの養成－」第14回日本リメディアル教育学会全国大会予稿集 pp.122-123.
- 中央教育審議会(2008)「学士課程教育の構築に向けて(答申)」文部科学省
- 松本美紀・鈴木崇夫(2018)「アクティブラーニング活動によるノートテイキングの効果的指導法の提案－4つの視点に着目した「よいノートとは？」の実践から－」第14回日本リメディアル教育学会全国大会予稿集 pp.120-121.
- 溝上慎一(2015)『アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換』東信堂
- 文部科学省(2017)「平成29・30・31年改訂学習指導要領改訂のポイント」文部科学省
- 山田洋平(2021)「アクティブラーニング型授業における授業形態の違いが大学生の授業効果に与える効果」『人間と文化』4, pp.224-233.

付記

本研究は以下で発表したものをまとめ直したものである。
鈴木崇夫・松本美紀(2019)「アクティブラーニングによる「用語の定義を調べる」過程のふりかえりから自律的学習を促す初年次教育クラスの試み」第15回日本リメディアル教育学会全国大会(金沢工業大学)